●令和４年度「税に関する作文」西宮市長賞受賞作文

【題名】「税金の存在意義」
【学校名・学年】西宮市立西宮高等学校　１年
【氏名】財田　大和

「税金なんて、なくなってしまえばいいのに……。」給料から万単位の所得税を引かれて手取りが少なくなってしまったことにため息をつき、給与明細を見返し、またため息をつくようなサラリーマンと同じような台詞を吐いたのは当時まだ小学生の僕だった。その当時は税金なんてものに関する知識は「ものを買ったときに８％上乗せされるもの」いわゆる消費税があるという知識しかなかった。そのお金がどこで使われてるかも知らずに。このようにかつての僕は「税金は無駄なもの」「税金なんて要らない」と本気で思いこんでいた。しかし、そんな考えは今はない。年とともに税金についての知識がふえ、税金の存在意義を知った。

なかでも一番税金の存在意義を実感したのは僕が中学生の頃に遡る。ある日、一冊の教科書が見当たらない。探しても、ない。家にも学校にもなかった。紛失して数日が経過したとき、僕は諦めて仕方なく教科書を自分で購入することにした。そして教科書を購入したわけだが、ひとつ感じたことがあった。教科書って、そこそこ高いんだ、と。それまで教科書の値段なんて考えたことなかった。教育の無償化によって無料で支給されていたことも理由にあったのだろう。この時僕は既に教育の無償化が税金によって支えられていることは知っていたが、どのくらいの税金が僕たち子どもの教育のために使われているのか知らなかった。当時の僕は興味本位で調べてみた。今でもあのときの驚きは忘れることはできない。なんと五兆円以上もの金額が使われていたのだ。そんなにも巨額だとは思ってもいなかった。このときはじめて僕は、自分が教育を受けることができるのは税金があるおかげなんだと実感した。

その出来事以降、僕の税金に対する考え方が変わった。「無駄」「不要」そんなことは一切考えなくなった。それどころか、「必須」「重要」とまで思えるようになった。税金は僕の、さらにいえば国民の生活を支えている柱だと言ってもよい。税金について知れば知るほど、税金の存在意義がわかってくる。今回僕が一例として挙げた教育の無償化は税金の使い道の一部でしかない。ほかにももっと多くの場所で多くの人々の生活を支えているに違いない。そんな税金がなくなってしまえなんて思っていた当時の僕を思い返すと未熟で恥ずかしいと本当に思う。税金がなければ生活できない。生きていけない。税金は大切だ。このことは誰にも否定させない。